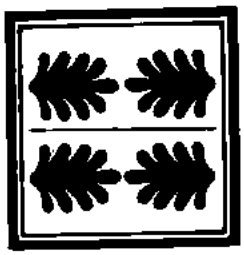
無名碑（上）

曽野綾子



講談社文庫

無名碑(上)
曽野綾子
昭和52年12月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京 (03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　　版　広済堂印刷株式会社
印　　刷　広済堂印刷株式会社
製　　本　株式会社千曲堂

© Ayako Sono 1977
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

無名碑(上)

曽野綾子

講談社

目次

無名碑(上)

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

無名碑
（上）

第一章

1

三雲竜起は、背骨を刺すような寒さの中で、米軍の放出衣料の市で買って来た防寒ジャンパーをはおってから、忘れ物はないかと、あたりを見廻した。古雑誌の山、空鑵、壁にはりつけた女優の写真のついたカレンダーなどが残っているだけで、手に持つべき荷物はひとつしかなかった。

本来なら、久しぶりの上京に備えて、ここのところずっと年に一、二回しか着ることのなかった背広を着て行くところである。しかし作業服ばかり見なれた眼に背広は何ともよそよそしく、竜起はそれを畳んで、外出用の短靴と共にしまいこんだのであった。

まだ寝ている人々の目を覚させないように、急造の宿舎の廊下を踏んで、三雲は外へ出た。夜勤の者が現場から上って来る時間にも早い。長靴をがぼがぼ鳴らして駐車場にあてられている空地へでると、まだ明け方の気配はなく、雪でほの白い荒島岳の稜線近くに、半月よりほんの少し

細くなった月が引っかかっていた。そのすぐ肩の所に見えるさそり座のアンタレスも三雲竜起にとって馴染深い星であった。信じられない偶然ではあるが、彼は二人一部屋の宿員宿舎の壁の隙間から、或る夜、寝ながらこのアンタレスを見つけたのであった。もともと杉皮葺の粗末な屋根だったが、星が見えるとは、何というひどい建て方だ、と思った。これでは、吹雪の日には、部屋の中に雪が降り込むじゃあないか。飯のまずいことや、宿舎の設備の悪いことに関しては、会社側に文句をつけるのに人並みに必らず加担する竜起であったが、この星の件だけは、遂に最後まで誰にも言わなかった。その星は誰からも見えるという訳ではなく、偶然に自分と視線があった時だけとすれば、それは、かなり宿命的な出会いであり、しかも羽目板から星が見える、などという言葉づかいは、あまりに柔かすぎて、組合の集りで話し合う問題としては笑い話になる恐れもあった。そのいわば親しみをこめ続けて来た星が、今、三雲を見送るように背後にあった。十一月初めに霙が降り始めてから、低く垂れこめたままの雪雲がこの冬の未明、ほんの一瞬、人人の知らぬ間に奇蹟的に晴れ渡っているのだった。

工事事務所に附属したバラック建ての診療所の前の、一つだけ灯った裸電球の下で、機械部の水田が、米軍払いさげのジープのエンジンを始動させているところだった。

「水田さん悪いね、朝早くから」

「いやあ」

軍手をはめた手が、凍えていて自由がきかないのか、水田はチョークを引くために、右の手袋を取った。すると蟬を電気用の黒いゴムテープで巻いた脂気の抜けた古皮のようにこわばった掌がむき出しになった。

「荷物はたくさんありますか」
「これだけです。今、積みますから」
トランクの枠が、ジープの床に当って鈍い音をたてた。水田はジープの座席の下から汚れたタオルを探し出して来て洟をかんだ。そのタオルの半分は、コンクリートがこびりついて、かちかちに固くなっていた。
水田は運転席の隣に散らかっていた紙類を、三雲のために片づけた。「作並建設」と胴体に名前を書きこまれた会社のジープは、すでにエンジンの震動で小刻みに震えている。チェインをつけた車輪に、泥と油脂で練り固められた雪がこびりついていた。車に乗り込む前に、ほんの一瞬、三雲竜起は、宿舎とその背後に連なる現場の全景を、もう一度脳裡に刻みつけようとしてふり返った。完成したばかりの五条方水力発電所の二本の鉄管路が、雪の斜面に微かな銀灰色に光りながら傷跡のように残っていた。かつてここは何もない静かな山の斜面であった。真名川は、九頭竜に注ぎこむ穏かな優しい流れの一つに過ぎなかった。それを人間共がむりやりに地下の水路におしこめ、発電所の真上から二本の鉄管によって落し、一万七千五百キロワットの発電機を動かしているのだ。竜起はふと自分は阿漕なことをした、と思った。それと同時に、彼は破壊的な欲求が身内に走るのを感じた。
今この完成したばかりの発電所を一瞬のうちに爆破できたらどんなに爽快であろう。真名川の水は再び自然の水路に還り、山の斜面には人工の傷跡もなく雪が降りつもる。三年半の悪夢は過ぎて、自然は再び眠りに帰る。
三雲竜起は車に飛び乗った。水田が車をバックした。ここから越前大野まで、約八粁の距離で

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

ある。

「今夜には東京ですか」

水田は少しばかり羨しそうな声を出した。

「鶴来に祖母さんがいるんでね。そこへ寄って行こうと思うんだけど、水田さんも東京？」

「いやあ、自分は静岡です。暖くて明かるい土地だからね、雪の降るところはもうまっ平だと思ったけど、今度も又、神通の方へ行かされるらしいけどね」

「僕も、東京にいられるのは暫くだと思うよ。今度はどこかなあ」

三雲は煙草に火をつけ、ヘッドライトの中に切りとったように捕えられる重々しい雪道の光景を見つめた。

「僕は藁靴はいて、よくこの道を歩いたよ」

「いつか上庄の小学校で野球の試合をしましたね」

水田は思い出したように楽しげに言った。彼の白い歯が計器盤の僅かな光の中で鮮かに光って見えた。

「あの時は、機械屋さんたちにやられてさんざんだった。だけど、ひどかったのは、校庭を借りた御礼に皆で草むしりに行った時だったでしょう」

「あれは暑かったです。臍のまわりに汗疹ができたからね」

その上庄の杉木立に囲まれた小学校のあたりまで来た時、初めて東の空は僅かに白み始めた。しかし風は電線を鳴らし、両側の、まだ眠っている民家の屋根からも、新雪を白煙のように吹きつけて寄こした。

「さあ、今日も又、吹雪くぞ」
水田が独り言のように呟いた。彼の言う通りだった。北陸には、まだ春の気配はどこにもなかった。

福井駅のホームに立ってからもなお、三雲竜起は鶴来の祖母を訪ねようかどうか迷っていたが、それは後になって考えてみると、彼の運命を決める大きな別れ道になったのである。
もしそこに、金沢行きの汽車が台車に白雪をこびりつけて時間通りに入って来なかったら、彼は十分後に入って来る筈の米原行きに乗って西廻りで、東京に帰ってしまったかも知れない。そしてもし、彼が西廻りの道をとっていたなら、彼は、彼のそれからの生涯に大きな係り合いを持つ二人の人物とも会うこともなかったのであった。
金沢行きの列車が定刻に入って来たために、彼は予定通り鶴来の祖母を見舞うために汽車に乗りこんだ。
三雲竜起が、祖母を訪ねるのをかなりためらったのは、東京へ着くのが半日ほど遅れるからではなかった。鶴来から汽車で三十分と離れていない金沢に、父の治忠が家政婦を相手にひとりで暮しているというのに、その父には会いに行こうとしない自分を、自分でも意識し、もしかすると、他人にも知られるかもしれないのが気重だったのである。竜起は裁判官だった父を今でもまだ心の中では許していなかった。竜起が数え年九つの年、父は母を離別し、母はそれっきり竜起の前に姿を現さないまま結核で死んだ。離婚の真相は極く一部の身内の者しか知らない。それも母の方に落ち度があったと認めたからか、一族の中から父のやり方を非難する声を竜起は今まで

に一度も聞いたことがなかった。しかしたとえどのように父に理があろうとも、満八歳の子供から母をとりあげていいということにはならない。

鶴来駅を下りて、本町通りを祖母の家の方へ向った時も、折からかなり吹雪き出したのを幸い、竜起は、外套の襟を立て、顔を俯き加減にして足早やに歩いた。いつ何時竜起の顔を知っている人に出会わぬものでもない。或いは雪に閉じこめられて退屈し切った人々が家の格子の隙間から道行く人を眺めていて竜起が鶴来へ下りたことを嗅ぎつけるかも知れぬ。するともう三、四日後には、金沢の長町の父の家に大して用事もなさそうな客が立ち寄り、「竜起さん、こないだ鶴来へおいでたようながやけど、こちらへも寄りなさったがか」などと注進に及ぶに違いないのだった。

祖母のいるのは、竜起の伯父に当る正次郎という人のやっている「福源」という呉服屋だったが、時ならぬ竜起の訪問を受けると祖母が仕事で出ていた伯父を呼び返しに小女をやり、凍りつくような縁側から障子一枚内側の大きな暖い居間の炬燵で、伊万里の皿に山盛りに作られた刺身で酒が出された。

「一晩も泊っていけんがか」

伯父が残念そうに尋ねた。

「はあ、明日からもう会社へでなければなりませんので」

「金沢のお父さんのとこへは、寄ってあげんの？」

祖母は竜起から一瞬、視線をそらしながら言った。

「この次、また出なおします。金沢かここかどちらかしか時間的に寄れなかったんですから。父

には言わないでおいて下さい」

父は今になって報復を受けているのだ、と竜起は答えながら思ったのだった。六時間が瞬く間に過ぎると、竜起は又伯父の家族に見送られて、寒い店のあがり框で重い長靴をはいた。明日からはこんなどたどたした靴をはいたり重ね着をしたりしなくても済むのだと思うと、急に竜起には東京へ帰る実感が湧いた。

汽車は福井発の上野行きで、すでに二十分延着したせいか、かなり混んでいた。それでも、竜起は、三等の客車の出入口に近い通路際にいち早く席を見つけ、汽車が動き出すや否や、緊張が一時に弛んだように眠った。間もなく彼は前の座席の人々が彼の膝を小衝きながら通路へ出て行くので目を覚したが、そのために改ってはっきり眼を覚そうとは思わなかった。汽車が何度もレールのポイントをつっ切って構内に入り、すれ違う蒸気機関車の喘ぎの中で停ると、拡声器が「金沢！　金沢！」と眠たげな声で呼んだが、それを聞かなくても、竜起にはそれが金沢だということは既に気配でわかっていた。それは父の住む町であり、この雪にも拘らず、父が万が一、誰か知人でも送りに駅へ来ていて顔を会わす破目になるのを恐れたからこそ、彼はずっと通路際の席で眠っていたかったのである。

再び彼の膝が微かに小衝かれた時、竜起は薄目をあけて鮮かな緑色のコートの裾と、ナイロンの靴下をはいた細い脚とが窓際の席に着くのを見たが、それ以上はっきりとその人物を見定めることは止めてしまった。ひとつには、汽車が金沢を完全に出はずれてしまう迄、彼は目を開けてはいけない、と自分の心に命じていたからだった。そして、駅から乗りこんで来た男たちの訛の強い、傍若無人の会話を聞いているうちに、夜明け前に起きて寝不足だった竜起は、再び深い眠

りに陥った。

どれだけ経ったかわからない。彼が目を覚したのは、寒さのせいだった。彼がはっとして目を開けると、前の座席の窓際に坐っていた緑色の外套の若い女は、じっと外を見つめていた。外と言っても、闇の中を走る汽車の窓ガラスは、車中の乗客たちのさまざまな寝姿を映し出すばかりだった。竜起が鏡代りの窓を見つめると、中で女との視線が合った。すると女は電気に撃たれたように、はっと目をそらせた。

竜起はその出会いが何となく楽しかった。追いつめて行けば、いつか生身の女の眼と眼を合わせられるかも知れない。しかし、その追いかけごっこをおもしろがるには、竜起はまだ年の割りに生ぶであった。彼はその女から視線を避けて、彼のすぐ前に、やはりいつの間にか乗りこんで来ていた、もう一人の若い娘の顔を見た。すると彼女が待ち受けていたようににっこり笑ったので、竜起は慌てた。汽車はかなり速度を落していたが、やがてぴたりと停った。

竜起は腕時計を見ることで我に還った。まだ八時半である。しんとした車内の向うから、欠伸と赤ん坊の弱々しい泣声が聞えた。

「ここはどこや」

男の声が言った時、風があおるように車体を吹きあげ、小さなつぶてになった雪を窓に叩きつけて寄こした。隙間風が口笛のような音をたてて吹きこんで来るにも拘らず、窓際の女は、竜起と目が合わないように、斜前方を見つめたまま身動きもしないのだった。

二十七歳の三雲竜起は、目の前の若い女が一人ではなく、いつの間にか二人にふえていることに軽い当惑と楽しさを覚え、何気ない視線の往復の中で、二人を観察せずにはいられなかった。

通路側にいつの間にか腰かけている娘は、野暮ったい茶色の粗末な外套を着ていた。足許を見ると、肌色の木綿の靴下をはき、紺色のゴム長靴をはいている。髪はパーマネントをかけていたが、セットはばらばらに乱れて、しかも鬣のように拡った髪を殆んど気にもとめていないらしい。

窓際の娘はまだ同じ姿勢を変えなかった。黒いリボンで長い髪を後で結び、尻尾のように毛先を垂らしている。きちんと揃えた爪先まで、つけこむ隙がないような感じであった。竜起は二人を比べて茶色の外套の娘のほうが、二、三歳も若いかと思い、次の瞬間には、彼女のまるまるとした毛深い、色の浅黒い顔立ちが若く見えるだけであって、実はもう二十五を過ぎているかも知れない、と思いなおしたりした。それに彼女は竜起の視線を少しも拒まなかったばかりでなく、むしろ意識的に待ち受けているようですらあった。二、三度彼女と目が合う度に、彼はたじろいで慌てて目をそらせ、次に本当に彼女の微笑に捕えられた時は、すっかり観念したような気持になった。そしてその柔かな無防備に近い優しさはすっかり竜起の気持をほぐした。

「今何時？」

茶色の外套の娘が尋ねた。

「八時三十四分です。今、どの辺かな」

「さっき能生というところを過ぎたわ」

汽車は又のろのろと走り出した。それにしても、この娘は何という哀れなオーバーを着ているのだろう。それは言い方を変えれば、綿埃を毛玉にしたような弾力性のない粗末な生地で作られていた。鮮かな色を着れば、人間まで美しく見えるという訳ではない。しかし終戦直後ならいざ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com